特集＝風景生態学

黄土高原の景観と人々

深尾葉子

現代思想 青土社 Vol. 20-9 風景生態学

景観とそこに住む人々は、時に極めて強い相互関係を持ちながら、そこに独自の社会、生活、文化を作り上げて行く。

私が、フィールドとして訪れる中国陝西省北部もまた、「黄土高原」という、極めて個性ある景観と密接な関わりを持ちながら、独自の地域文化を育んでいる。この地域の「民歌」は、侵食を受けた黄土層の台地の谷間を挟んで、谷の向こう側に声が届くようにと歌われる。この地域の住居の形態である「窰洞」は、黄土の性質を利用し、主として土と水と石で作られ、黄土高原の環境に適合した居住空間を作り出している。一般に、「地域文化」と呼ばれるものは、その地域の環境や生態と密接に関わりあいながら作られてゆき、そうして作り上げられたものが、新たに景観を構成する要素となってゆく。景観とは、このように、地域と環境の相互作用の中に、刻々と立ち現れるものなのであろう。

黄土高原の景観を一言で言うならば、冬は見渡す限りの荒涼とした「黄色い大地」、夏は、うっすらと緑に覆われた、なだらかな斜面と食谷。冬には河が凍てつき、夏は黄沙が舞い上がる(**写真1、2**参照)。この地をかつて覆っていた森林は、秦、漢時代より、徐々に失われ始め、明代末期にはほぼ現在と同じ状況になっていたと言われる。地域によって、あるいは時代によって、循環する社会と非循環に陥る社会があるとするなら、この地域は、緩慢ではあるが長い非循環の過程を歩んできたと言えるかも知れない。人々は、森林を切り、草原化した大地で、畑作と放牧を行い、浸食を受け剝き出しになった土地から、石を切り出す。次のステージへ移った景観が、もとの状態に戻ることは極めて少ない。

考えるに、「人間と自然の関係」で、循環を維持する関係が成り立っていた例は、むしろ、少数なのかもしれない。空間的にも、時間的にも大勢を占めているのは、むしろ「非循環」の関係であったといえる。この場合の「循環」とは、物質の流れが、人間というファクターを介した上で、元の状態に近い状況に戻りうることを指す。それは、景観的な恒常性としても表れる。ここで、問題としたいのは、圧倒的な「非循環」のなかで、稀に表れる「循環」をもたらす社会のシステムは、一体どのようにして作られるのか、それは、どういうインパクトで起こってくるのか、という点である。本稿で取り上げる事例では、純粋に物質的なインパクトよりも、むしろ、景観や、それをめぐる文化的価値観を介した要素の介在が、直接的な誘因となって働いている過程が見て取れる。本稿で紹介するのは黄土高原に展開する、ささやかな一事例であるが、景観と地域社会の相互関係を見る上で、また、さらに人間社会というファクターが、物質循環に可逆的な作用をもたらす事例を知る上で、非常に興味深い。圧倒的に不可逆な流れの中で、ささやかに存在する循環の萌芽に焦点を当て、そのプロセスへと目を向けてみたい。

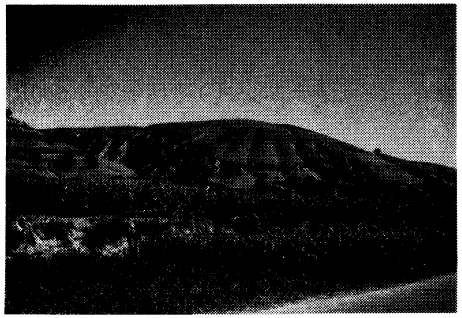


写真1　土壌流出に悩む黄土高原

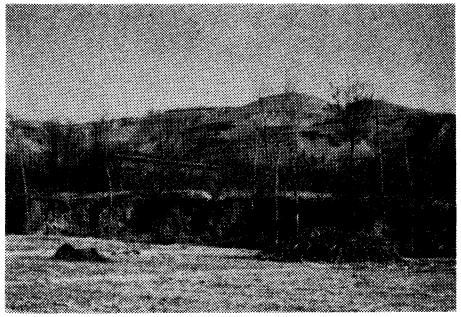


写真2　黄土高原の冬

地域の復権と廟の再興

八十年代中国は、開放改革路線と共に、それまでの中央集権的システムから、各地方や小規模単位へと、決定権や自主権が移行し、各地域レベルでの活動の自由度も増した。その結果、全国統一的な目標の達成に向けて地域が動くという図式から、地域内の文脈で、それぞれのものさしに応じて、主体的に行動を起こし、それぞれの方向へ向けて進むことが可能となる社会状況が出現した。かつて、農村社会での一つの結接点として機能しており、その後文革等の政治的、社会的変動を経るなかで、その社会的機能及び、存在も危うくされていた「廟(ミャオ)」の復活も、そういった地域の復権に伴って現れた現象の一つである(1)。ここ陝西北部(陝北(シャンペイ)と略称される)でも、最も有名であった白雲山に次いで、黒龍王という廟が、近年急速に、その名を知られるようになってきた。ここは、水の神様である龍を祭る廟で、その歴史は約四百年前に遡る。黄土高原に、よく見られる谷の一つであるこの黒龍潭には、次のような伝説がある(2)。

かつて、ここは、九龍潭と呼ばれ、九つの泉が湧きだす深い谷間であった。ある時、近くの村に住む鄭家の若い娘が、兄嫁と一緒に河へ洗濯にやってきた。二人が洗濯をしていると河の上流から桃が流れてきた。兄嫁がその桃を拾い上げると、若い娘は「姉さん、その桃をちょっと見せてくださいな」と言い、桃を手にとって匂いを嗅ごうとした。すると、突然桃は娘の口に飛び込み、娘は桃を丸ごと飲み込んでしまった。それを見た兄嫁は「まあ、この娘ったら、賤しいんだから。自分一人で桃を食べてしまって、私に少しも残してくれないんだから」と言う。娘は驚いて「私も食べようと思ったわけではないのに、匂いを嗅ごうと思って口元に持っていったら、突然桃が口の中に飛び込んできて……」と、ばつが悪そうに答えた。二人は、少しおかしいとは思ったけれども、取り立てて他の人にこうほどでもないと思い、そのまま、何でもなかったかのように家に

帰った。

ところが、数日経って、その娘が身籠もっていることが判った。お腹は日に日に大きくなり、それを知った両親は「ちゃんとした娘に育てたつもりが、なんて恥知らずなことをしてくれたもんだ！」と激怒した。娘は目に涙をいっぱい浮かべて、「父さん、私は決して身に覚えはありません。自分でも何が起こったのか判らないのです。でも、こうなってしまったからには、私を縄でくくって家から連れ出し、縄が切れたところで、私を捨てて下さい」と願い出た。父親は泣く泣く、娘の言う通りに、娘を縄で縛り、家を出て歩き始めた。すると、廟のある谷の手前で縄が切れたので、父親は仕方なく、後ろ髪をひかれる思いで、娘をその場に置いて立ち去った。

家に帰ってみると、母親が「あなた、大事な娘を一体何処に置いてきたって言うの！　私をそこへ連れていってちょうだい」と叫んだので、再び老夫婦はその場へ赴いた。二人がそこへ辿り着くと、何と娘はもうとっくに死んでしまっていて、その口と耳と鼻から、五匹の龍が出てくるのが見えた。その龍はそれぞれ、青、赤、黄、白、黒の五色で、人の気配を感じて、それぞれ別の方角へと散っていった。そのうちの青い龍は、娘の住んでいた村のすぐ近くに、赤い流は黄河の西岸の村に、黄色の龍は五里溝という谷合にそれぞれ住みつき、白い龍は黄河を越えて、戻ってくることはなかった。最後の黒い龍だけは、暴れ龍で、しかもしばしば霊験を表すので、周囲の人々はその龍のために位牌を建て、線香を供えた。あるとき、人々は、その位牌が突然なくなっているのに気づいた。方々を捜し回ると、現在の黒龍潭の場所に、位牌が発見された。人々は、元の場所へ位牌を移し替えたが、しばらくすると、また位牌は移動している。いぶかしく思った人々は、ある夜、一体誰が、動かしているのか確かめようとして、こっそりと見守った。すると一匹の大きな狐が、位牌を口にくわえて運んでいたことが判った。そうして、人々は、この黒龍潭が聖なる地であることを知り、改めて位牌をこの地に移すことを決めたのである。

この黒龍潭は、その後、雲を呼び、雨を降らせる廟として人々に親しまれ、神殿が建てられるようになった。さらにその龍の産みの母である龍母嬢嬢も山頂に祭られている。この黒龍潭が一躍有名になったのは、一九世紀末、日清戦争の際に、苦戦する清の船団を助けるべく、落雷と大雨を起こして、日本の船団を撃退させたのが、この楡林郊外の黒龍王廟であるとされた際であった。その後、光緒帝から扁額が送られ、楡林八景の一つとして、一層その名を知られるようになる(3)。

これが、黒龍潭の起こりとそれにまつわる言い伝えである。最初に廟の建物が建てられたのが明の正徳年間(一五〇六～一五一二)で、清の光緒年間と民国期に、修復及び舞台や碑楼と呼ばれる石のアーチが作られている。また、その神殿の傍らに湧き出す水は、万病に効くと言われ、人々の信仰を集めている。さらに、毎年旧暦の六月三日には大規模な廟会が催され、廟の周辺を埋め尽くすほどの人が集まってくる(**写真3**参照)。

新たな生命を与えられる〝廟〟

こうして、地域で長く親しまれてきた廟であるが、文革期に、やはり例外にもれず破壊を受け、再び修復が行われるのは、一九八二年になってからである。

全国的な廟及び文物の復興の気運を受けて、一九八一年に黒龍潭から近い商業鎮である鎮川でも黒龍潭文物古跡管理会(以下、文管会と略す)が自発的に組織された(4)。その主旨は「この文物及び旧跡を復活させ、保護し、民間芸術の交流と、地域の人々の精神生活の拠り所としよう」というものであった。こうして、地域での自発的秩序形成の場として、廟が復活しようとする中で、一人の重要な人物が現れる。この、廟会の委員長を勤めることになる王克華氏である。

同氏は農民出身で、黒龍潭のすぐ近くの紅柳灘村で果樹園等を経営する一方、石匠、木匠としても有名で、また八〇年代前半には、万元戸として知られていた人物であった。しかし、自己の経済的利益のみを追及するのでは飽き足らず、何か地域の中で役に立つことに従事したいと考えていたところ、この廟の再建と出会った。黒龍潭文物古跡管理会の責任者となった同氏が先ず行ったのは、自己の技能を生かして、立派な碑楼を彫り上げることであった。それまでの黒龍潭は、谷合の奥まったところにあり、以前の碑楼も廟のすぐ近くに立つ小さなものであったため、遠くからそれと判るものではなかった。そこで、同氏は、廟を立派に復興するにはまず、遠くからでも見え、人通りの多い大通りに面したところに、巨大な碑楼を建てるべきだと考え、自分自身で設計し、仲間の石匠と共に彫り始めた(**写真4**、**5**参照)。果たして、その碑楼の威力たるや、絶大なものとなっていった。

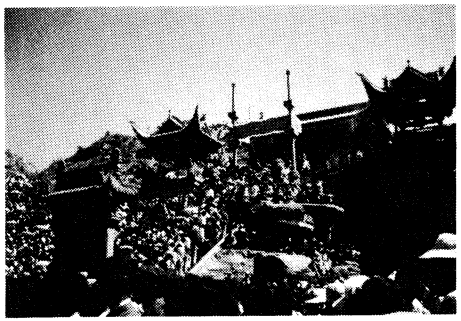


写真3　廟の周辺を埋めつくす人の波

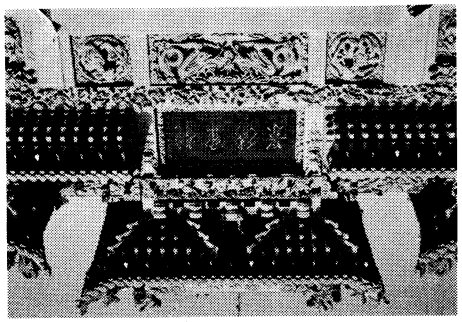


写真4　王克華氏のデザインによる碑楼

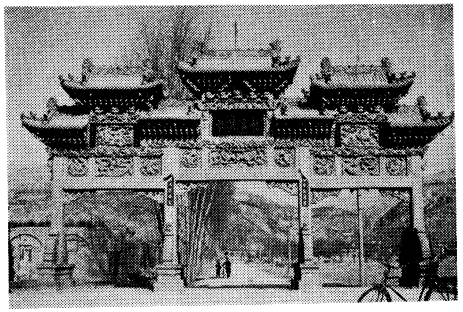


写真5　メインストリートに面して立つ碑楼

中央に「龍潭勝景」の四文字を配し、全体に龍をあしらった三連の碑楼が、米脂県と楡林を結ぶ陝北の幹線道路に面して立ち上がるや、幹線道路から黒龍王廟に至る、川筋にそった道は、長い参道となり、幹線道路を通る人々を、次々にこの廟へと引き付けた。この碑楼はたちまち、陝北一帯の話題となり、この立派な碑楼を一目見ようと、各地から人が訪れ、翌年の六月三日の廟会も、いつにない人出となった。

ここで、この土地のミニコミ紙が、黒龍潭の特集を組んだ際の、この碑楼に関する記述を抜き書きしてみよう。

黒龍潭は、紅柳灘村の東の谷間の崖の下に位置しており、風のように疾走するバスの中からでは、その存在に気づくのは難しいと言われている。しかし、紅柳灘村に偶然にも一人の聡明な石匠——王克華という人物が存在した。彼は、独特のデザインと斬新な発想で、黒龍大王の山門に(それは紅柳灘村の村の入り口でもある)、人々の注目を引く大きな石の碑楼を建てた。すると、行き交う人々は皆、これに無関心ではいられなくなり、黒龍潭の名声も急速に高まった。この米脂県から榆林へ続くこの公道は、毎日何万人もの人々が行き交うので、新しい黒龍潭の目印であるこの立派な石の碑楼は、それらの人々に忘れ得ぬ印象を残したのである。

(榆林地区群衆芸術館『信天遊』一九八八年第一期、総二四期)

王克華の意図した通り、この荒涼と広がる大地に石の碑楼が建てられると、それは、厳然とした存在物として、周囲に影響を及ぼし始めたのである。我々が、その前を通り過ぎても、思わず見過ごしてしまいそうな石の建築物が、人々を引き付け、まさに求心性を持とうとしていた地域を、新たな段階へと導いたのである。そして、彼らの景観に対する働きかけは、これにとどまらなかった。年に一度の廟会は、数十万元の収入をもたらし、それを用いて、次々と新しい神殿、舞台、そして一度に千人以上の人が宿泊可能な宿泊所等が建設された(**写真6、7**参照)。

この様に、廟に人々の関心が集まるのには、先にも述べたような社会背景が存在する。当時、人々が、改革開放政策の中で、新しい社会、経済活動に従事する一方で、伝統的な宗教や人間関係へと回帰してゆく傾向が見られた。先に引用した『信天遊』ではその様子を、「スーツを着、革靴を履いて、おみくじや占いに精を出す不思議な現象」(5)と表現している。当時、経済的、社会的自由化と同時に訪れた、価値観の喪失に、人々は頼るべきものを求めていたともいえる。そこで、枯れかけた水路に水が通るように、打ち捨てられていた地域の象徴や社会紐帯が、急速な勢いで、復活、蘇生していったのである。こうした背景にも支えられて、廟の活動は年々盛んになる。それと同時に、廟会の委員長を勤めていた王克華の名も、広く陝北一帯に知れ亘るようになったのである。

彼自身は、廟に対する信仰があったわけではない。むしろ、地域活動を行うために、廟に目をつけたと言える。彼は、三期続けて廟会の委員長を勤めたが、その選出方法は、廟の龍王の前で、占木を数回投げ、三回同じ数字が出た人が委員長を勤める、というもので、三期とも彼に同じ数字が出たと言う。少なくとも形式上は、彼は神に選ばれているのである(6)。

再度、景観への働き——植林

こうして、軌道に乗ってきた廟の活動であるが、次に行ったのが、廟の周辺の禿げ山への植林であった。そもそも、この地域では、先にも述べたように、水土流出が激しく、それが深刻な問題となっていた(**写真8**参照)。植林を行うに至った過程を、同委員会からの書簡では次のように描写している。

一九八〇年になって、全国で文物保護が全国的に盛んになるに連れ、一九八一年鎮川の南の九つの村で、自発的に黒龍潭文物古

跡管理会が結成された。その主旨は、この文物及び旧跡を復活させ、保護し、かつての彫刻を復元し、民間芸術の交流と、地域の人々の、精神生活の新たな依り所としよう、というものであった。しかし、この事業を始めるにあたって、この地域が歴史的に、植生が破壊され、深刻な土壌流失に悩まされている土地であるという事実が立ちはだかり、このことの解決なしには、文物の保護もあり得ないという結論に達した。

(一九九一年八月二日付け、黒龍潭文管会)

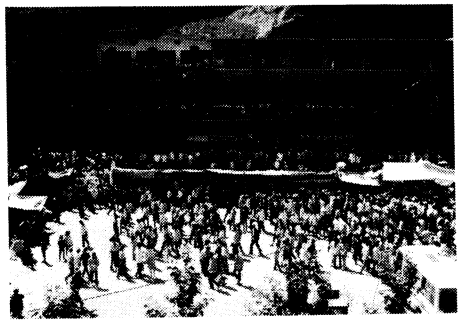


写真6　廟会の際千人余りの人が宿泊する宿泊所

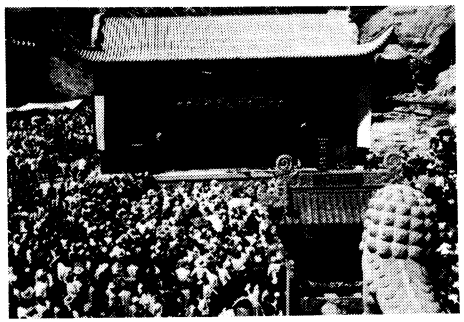


写真7　地方戯を奉納するための舞台

これを見ても判るように、この、全国でも珍しい民間団体による自発的植林は、必ずしも水土保持を目的に出発したのではなく、あくまで、修復した建物の保持から出発している。つまり、建物を水土流失による崩壊から防ぐことが原動力となって植林がスタートしたのである。この植林を最初に提唱し、また実行に移したのが、やはり先の廟会委員長、王克華であった。彼の構想には、この地を文物の保護だけでなく、緑化先進地区としての「景勝地」として成り立たせようという考えがあった。こうして、徐々に緑化が進められつつあったのだが、一九八八年に至って、地区の林業科学所の技術者が、それまでの植林の実績を基に、さらに一歩進めて、樹木園をつくる計画を打ち出し、それに文管会が賛同し、さらに地区、市、林業単位の協力を得る形で、樹木園の計画がスタートした。ここに至って、初めて、それまで「民間組織」として行ってきた活動が、行政の賛同と援助を受ける形へと移行したのである。こうして、廟会の収入を用い、地域の林業専門家の助力を得て、樹木園を建設する母体が発足した(7)。

ここで、この樹木園の計画と、当地の自然概況を紹介したい。まず、この地域の自然概況であるが、気候的には、内陸性の半乾燥地帯に属し、年間降水量三七五～四二〇㎜で、降雨は夏期に集中し、年間平均気温は八・一℃。冬季の最低気温はマイナス一八～二〇℃に到る。乾燥度から言っても、夏期と冬季の気温格差から言っても、植林を行うには、極めて困難な条件にある。したがって、樹木園の主旨も、まずこの地域に適性のある樹種の試験的育成、品種改良、また、絶滅の危機にさらされている樹種の収集、保存、新種の導入といったものを重要な項目として挙げている。計画では、約三〇ヘクタールの土地を、緑化Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区、新種導入Ⅰ・Ⅱ区、希少種植栽区、経済林区、庭園緑化区という八つのエリアに分け、それぞ

れの目的に応じて出来るだけ多様な樹種を植えるよう配慮している。まず、緑化区では、アカマツ、コノテガシワ等、この地で普遍的に植樹され得るような、常緑樹が植えられる。新種導入地区では、日なた斜面と、日影斜面とに分けられ、マツやイチョウ、椿などが日なた斜面に、トウヒ、カバノキ等が日影斜面に植えられている。また、経済林区では、経済的収入を得られる桃、杏、スモモ、胡桃、葡萄、サンザシ等の果樹が植えられ、庭園緑化区では、バラ、牡丹など、鑑賞用樹種が選ばれている。

我々が、調査に訪れたのは一九九〇年で、この樹木園が発足してからまだ二年目であったので、景観的に劇的な変化が起こるとまでは行かないまでも、廟の周辺の山や斜面に、すでに苗木が植えられ、

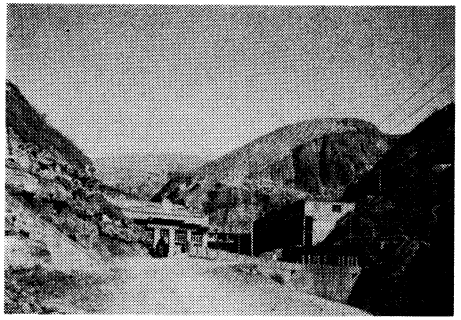


写真8　廟に向かう参道と廟をとり囲むハゲ山

写真9　植林の成果が徐々に現われつつある廟の周辺

それが、着実に根を下ろしているのを目にすることが出来た(**写真8、9**参照)。三年目にして三百種余りの樹種が植えられている。資金源は、全面的に廟に寄せられる「お布施」によるもので、植林を行う為の土地の徴用費だけでも一万元を越すと言われている。

しかも興味深いのは、その植林が、周辺の人々の信仰を集める廟の活動として行われているために、多くの人々の奉仕労働によって、入念に手を加えられ、維持管理されているという点である。ここに、各地で行われている他の行政主体の植林とは、決定的に異なる特徴が見られる(8)。つまり、この地の植林は、「廟」というファクターを介しているがために、地域における意味的な文脈、ないしは価値を獲得し、その存在基盤を得ているのである。ここに植えられた木々は、物理的な意味で定着しているのと同時に、社会的な意味で、また価値的な意味で、根を下ろしているのである。ある一定の地域社会で植林を行うには、むしろ後者の存立基盤を獲得することの方が、重要な意味を持っているのかもしれない。

地域に求められた存在

ここで、あらためて、この中国国内でも珍しい「民間主導型植林」の仕掛け人となった人物、王克華の歩みを振り返ってみよう(9)。現在五十代にさしかかろうとする彼は、二十代の息子夫婦と、現在小学生の二人目の息子、そして妻という家族構成である(**写真10**参照)。幼少の頃から優秀であった彼は、一九六〇年に綏徳師範学校を卒業後、しばらく教職についていた。しかし、おそらく当時の変動の中で、自ら教職を辞し、農民として生きる傍ら、得意の木工や彫刻に没頭する日々を送ることになる。七十年代後半から、商売も始め、

写真10　手前から2番目が王克華氏。その左奥が長男、手前が次男。さらに左手前が妻、奥が長男、嫁。左から3番目が筆者。王氏の自宅の窰洞の前で。

八十年代当初には万元戸となるほど、経営の才覚も持った人物であった。しかし、常に在野にあった彼の存在が、地域社会で十分に認められていたとは言い難い。彼は、そんな中で、何とか地域の文脈の中で、自己実現をしたいと考えていた。そこへ表れたのが、廟の再興という事業であった。

先にも述べたように、彼は実際に廟に対する信仰を強く持っていたわけではない。ただ、地域の求心性を持ちうる場として、また地域に影響力を与えうる場として、廟に着眼したのである。そして、廟会の委員長として、廟の運営に、また地域の振興に力を惜しまない彼に対する信望は、年ごとに高まり、我々が訪れた際には、彼の名は、黒龍潭という廟の名前と共に、周囲数百キロに及ぶ陝北という地域一帯で知られるまでになっていた。

実際、我々も、この地域の調査を計画した際、当初からこの廟の存在を知っていたわけではなかった。予備調査として、調査員が西安に集まった際、陝北出身の人々に紹介を受けて、この廟を訪れることにしたのであるが、その旅の途中、我々はしばしば、この廟会の委員長の名を耳にすることになった。

そして、十数万人の人手で賑わった年に一度の廟会の間、彼は一週間近く、不眠不休で現場の統括と運営にあたり、奉仕労働に従事する人々に、声をかけ、労をねぎらっていた。その姿はあたかも「地域の王様」とでも言いたくなるような、威厳と尊厳に満ちていたのである。

彼が、これほどの信望を獲得し、地域に対するインパクトを与え得ることが出来たのは、彼が石匠であったことと大きく関わっていると考えられる。うねりを作りだそうとする地域の動きの中で、「碑楼」という、景観の中で厳然と存在感を持ちうる事物を作り出す能

図1　黄土高原での非循環過程

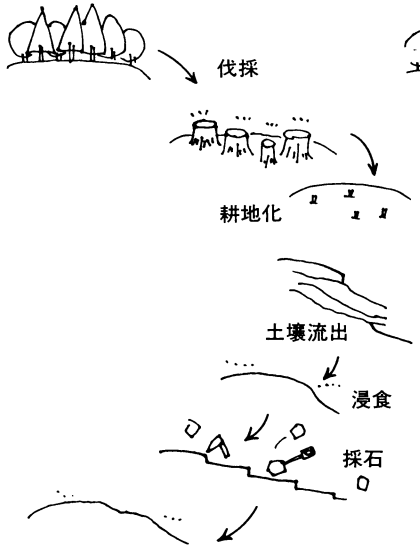
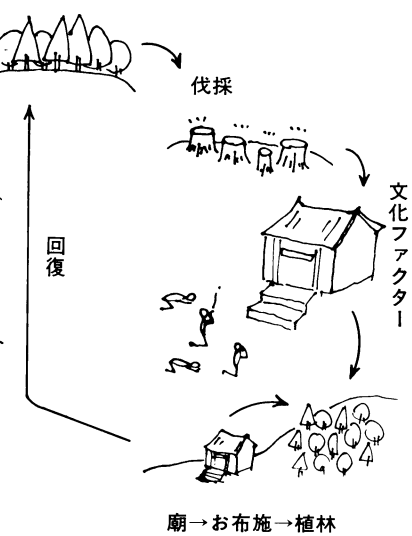


図2　黄土高原での循環モデル



力を彼は持っていたのである。つまり、彼は景観に変更を加えることで、地域に新たなうねりを与えることができたのである。この相互関係の成り立ちは、彼が目に見える形で空間を改変して行ったことによるところが大きい。そして、後に行われる植林もその一環として捉えられるのである。

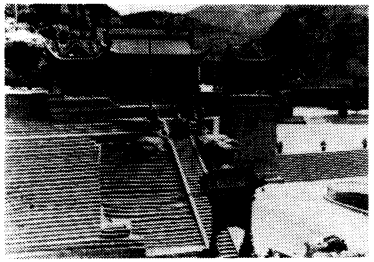
この、植林という周囲の生態環境に対する地域の働きかけもまた、必ずしも直接的にそれと認識されていたわけではなく、あくまで「廟」という別の価値ファクターを介在したものであり、景観の創造欲求が、直接的な原動力となって働いていたのである。そして、王克華という人物は、この景観と地域社会の相互作用的な、情報の交換現象を見事に捉え、その中に自らの行為を確実に投入して行ったと言えるのである。

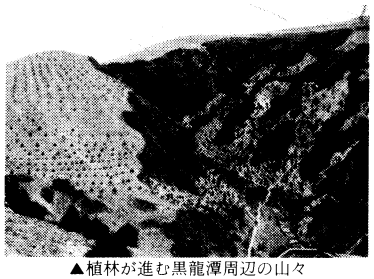
循環する社会、非循環の社会

ここで、冒頭の問題設定に立ち帰り、社会の「循環」、「非循環」システムという視点に照らして、もう一度この事例について考えてみたい。

既に述べたように、この地域は長い歴史的過程の中で、非循環の歩みを、緩慢に、しかし確実に進めてきている(図1参照)。そこに生きる個々の人間の力は、余りにも無力で、圧倒的な非循環の流れの中に巻き込まれて生きるしかすべがないかのようである。人々の動きは、むしろその「非循環」を一層押し進めるような形で作用している。今回の事例が興味深いのは、そんな中で、ささやかながらも「非循環」に抗する動きが、人々の間から自生的に起こっている点にある。

当然のことかもしれないが、ある社会が循環を達成するにあたっ


▲廟の全景。手前が民国時代に建てられた碑楼

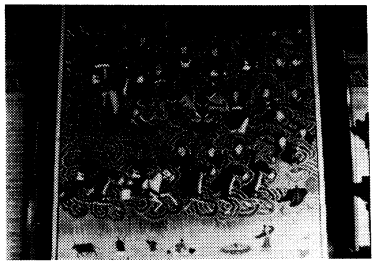

▲植林が進む黒龍潭周辺の山々

▲現在の碑楼

▲同上

▲碑楼に刻り込まれた龍

▲樹木園に立つ王克華。
ものごしの優しい落ち着いた人物である


▲廟内の壁画。雨をもたらす黒龍王を描いたもの

▲春節の黒龍潭。秧歌の隊列と
それを見に来る人が山腹まで埋めつくす

▲光緒帝から扁額を送られる図

▲春節の廟の賑わい。
広場で踊るのは老人腰鼓隊

ては、何らかの文化装置を伴っている。つまり、何らかの文化装置、社会装置の中に、循環を達成する仕掛けが埋め込まれている。そこで重要なのは、間接的信号によって、結果として循環が成り立つ仕掛けになっていること、そしてバラバラの社会構成要素が、文化装置、社会装置によって「関係」づけられる、という点である。この「循環」および「関係性」の重要性については、中村尚司氏が、つとに指摘しているところであるが(10)、バラバラの構成要素を関連付け、情報を環流させるためにも、この文化装置、社会装置が必要とされるのであろう。ここに挙げた事例をもとに、この地域での循環システムの一つのモデルを表すならば、**図2**のようになると言えるだろうか。ここで言う「文化装置」がまさに「廟」であり、情報をバラバラの行為主体に環流させ、フィードバックしてゆくのが、廟をめぐる「景観」の変化だったのではないだろうか。

思えば私達は現在、巨大な非循環社会に身を置いて生活している。かつての、循環をもたらす社会装置は、ほとんど壊滅し、以前とはまったくことなる物質の流れの中で、我々は新たな循環のための社会装置、文化装置を獲得しなければならない段階に来ている。

複雑化し、ともすれば本質的な論理を見失いがちな、現在の我々の社会の中で、この陝北での人々の試みは、明快で新鮮な視野を、我々に与えてくれているように思える。

先回、本誌でも紹介した窰洞の生活の舞台でもある同じ地域から、筆者は自分自身の生きる、巨大な非循環社会を相対視し、また、それを解くための多くのヒントを与えられている。

註

(1) 廟とは、中国における信仰の場を表す総称としても用いられるが、ここでは主として、民間信仰に基づく、道教的な神を祀る場を指す。他に、土地廟、関帝廟等があり、農村部に普遍的に見られる。

(2) この故事は、禾子「黒龍潭的伝説」の採録（榆林地区群衆芸術館『信天游』第二四期一九八八年九月号）による。

(3) 「龍潭傳景」（『信天游』前掲号所収）。

(4) 以下は一九九一年八月二日付け、黒龍潭文管会からの書簡による。

(5) 「黒龍潭的旗幟」（『信天游』前掲号所収）。

(6) 一九九〇年八月同地を訪れた際の聞き取りによる。第一回の予備調査として初めて陝北を訪れた同調査は、筆者のほか、井口淳子（大阪大学大学院博士課程）、上田信（立教大学助教授）、富田和明（当時、民族学院留学生）の四名で約二週間にわたって行われた。同調査のもようは、中国語友の会編『中国語』一九九一年四月号、特集「中国の人・土地・社会――フィールドワークから見えてくるもの」の冒頭「陝西北部の廟会への道」に簡単な紹介を試みた。

(7) 一九九一年八月二日付け、文管会からの前掲書簡による。

(8) 劉金「榆林建成黒龍潭山地樹木園」（『中国・花卉報』一九九一年九月一三日号第三三七期）。

(9) 聞き取り及び、前掲「黒龍潭的旗幟」による。

(10) 中村尚司『豊かなアジア、貧しい日本』学陽書房一九八九年七三頁。

＊尚、ここで紹介した黒龍潭の植林の試みは現在も続けられており、今後も引き続き調査を行う予定である。また、文中に使用した写真は断りのないものは、一九九〇年及び、一九九一年冬に筆者及び、同行の調査者が撮影したものである。

（ふかお　ようこ・地域研究）

特集＝風景生態学

南に喬木あり

『詞経』の風景

上田　信

南有喬木　南に喬木あり
不可休思　休ふべからず
漢有游女　漢に游女あり
不可求思　求むべからず
漢之広矣　漢の広き
不可泳思　泳ぐべからず
江之永矣　江の永き
不可方思　方すべからず

（『詩経』国風・周南、「漢広」第一章）

『詩経』は中国の春秋時代以前の周の時代、紀元前八四〇年から前六二一年ごろに歌われていた歌謡であるとされる。その歌謡は、周王室や諸侯に仕えていた楽師たちが継承し、前漢の始めに編纂され、テキストとして固定された。現在、読むことができるものは、毛亨によって編集されたものなので、『詩経』はまた、「毛詩」とも呼ばれることがある。このテキストは、「風」「雅」「頌」の三つの部分から構成されている。「風」は各地域で歌われていた歌謡のことで、「国風」とも言う。「雅」は貴族社会の宴会や儀礼のときに演奏された歌謡、「頌」は廟歌であり、祖先を祭るときに歌われた。右に掲げた「漢広」は、「国風」中の「周南」に収められている歌。『詩経』全三〇五篇の歌のなかで、第九番目に位置づけられている。

今、私の手元には、二つの『詩経国風』と題された訳注本がある。一つは吉川幸次郎氏の手になるもの(1)で、初版は一九五八年。他の一つは白川静氏が訳注を加えたもの(2)で、一九九〇年に発行されている。「漢広」は、それぞれどのように解釈されているのだろうか。

南のほうにそそり立つ木があるけれど、蔭が少ないので休めない。
漢の川のそばに散歩する娘がいるけれど、(身持ちが)固い娘だから話しかけられない。あの漢の川の広さよ。泳いでもだめ。あの揚子江のはるけさよ。筏ではだめ。そのようにあの娘は、したってもだめ。

と解釈するのは、吉川氏である。この歌の背景として、氏は「貞潔な娘を慕い讃える若者の歌。古注では、南方の漢水と揚子江に近い地域も、(周の)文王の感化をうけ、風俗が正しくなった結果――」、